2006 年

モンゴル研修報告書

2006 Study Tour, Mongolia

September 2006

関西学院大学総合政策学部
研究演習Ⅰ　上野研究室
Kwansei Gakuin University
School of Policy Studies

目次

1. 研修日程/Schedule 3
2. 訪問先リスト 5
3. 研修内容/Training Program 5
3-1. MCC Internship 5
3-2. Economic Development & Human Resources Training 7
3-3. Ministry of Construction 8
3-4. Habitat for Humanity, Mongolia… 8
3-5. Input Household "Stove Project" 10
3-6. Suruga Corporation in Mongolia 11
3-7. Mongolian University of Science and Technology 12
3-8. Japan Embassy in Mongolia 13
3-9. JICA in Mongolia 14
3-10. GTZ– German Technical Cooperation
:Integrated Urban Development Program..... 15
3-11. NGOs and NPOs in Mongolia 18
3-12. City of Ulaanbaatar 19
3-13. Instructions for Mongolia Travel 21
3-14. Mongolian History 22
4. Consumer Satisfaction Survey in Terelj 25

研究演習 I/参加者リスト/ Participants ..... 31.

１.研修日程/Schedule

９月２日（土）

13:40　日本出国　ウランバートルへ

9月３日（日）

01:30　ウランバートル到着・入国

04:15　市内のフラワーホテルにチェックイン

10:40　市内観光（ザイサンの丘、スフバートル広場、ガンダン寺）

14:00　郊外のゲル地区、ロシアブランドコミュニティー訪問

9月４日（月）

09:30　Enkhtuya 氏と面会（MCC の概要について）@MCA　Mongolia Office　KhasBank Building

11:00　Barry 氏と面会(MCC の職業訓練プロジェクトについて）@MCA　Mongolia Office

15:00　建設省にて Enkhbayar 氏と面会、資料収集

９月５日（火）

10:30　Khan-Uul 方面の低所得者コミュニティー地区を偵察

14:00　統計局

15:00　図書館に資料探し

9月６日（水）

10:00　シティーオフィスにて Oyuntsetseg 氏と面会（ストーブプロジェクトについて）

14:00　ジャパンタウンを訪問。スルガコーポレーションの仲氏と面会（ニュータウンについて）

15:00　モンゴル大学見学。Dashjamts 氏と面会（大学間同士の交流）

9月７日（木）

9:30　日本大使館で小林氏と面会（日蒙関係、モンゴルの現状について）

11:00　Bodi Tower にて JICA の平野氏、森本氏と面会（JICA、モンゴル都市問題について）

14:30　GTZ　Office にて Rush 氏と面会（低コストハウジングプロジェクトについて）

9月８日（金）

9:00～18:00　日本センターにて MCC から出された課題「ツアーリストの顧客満足度調査」の作成、モンゴルについてまとめ。14:00　上野宏氏と面会 15:00　Gardi 氏と面会（NPO について）

9月９日（土）

11:00　ツアーリストキャンプの顧客満足度調査を兼ねた「テレルジ旅行」に出発

9月 10 日（日）

13:00　数箇所のゲル地区を回って調査

9月 11 日（月）

13:00　テレルジ出発、調査

16:00　ウランバートル到着

9月 12 日（火）

01:20　モンゴル出国

Saturday, September 2

13:40 Departure from Japan

Sunday, September 3

01:30 Arrive at International Airport in Ulaanbaatar.

04:15 Check in Flower Hotel

10:40 City Tour

14:00 Ger district site visit

Monday, September 4

09:30 Briefing by Ms. Enkhtuya Oidov at the MCA Mongolia office, KhasBank Building, Room 207

11:00 Meeting with Mr. Barry Stern, MCC Vocational education project expert at the MCA

15:00 Metting with Mr. Enkhbayar, Advisor to the Minister of Construction Ministy of Urban Development and Construction

Tuesday, September 5

10:30 Visit to construction site in Khan-Uul district

14:00 Statistical Office

15:00 Open Forum Society Library

Wednesday, September 6

10:00 Meeting with the WB energy efficient stove project

Meeting with Ms. Oyuntsetseg at 12th floor of the City Mayor's Office

14:00 Visit Japan Town, Meeting with Mr, Naka

15:00 Technical and Science University. Meeting with Mr. Dashjamts

Thursday, September 7

9:30 Embassy of Japan

11:00 JICA office at Bodi Tower

14:30 Meeting with GTZ Low-cost Housing Project

Meeting with Mr. Ruth Erlback at meeting room of the GTZ Office

Friday, September 8

9:00～18:00 Workshop at Mongolia-Japan Center 14:00 Meeting with Hiroshi Ueno & Mr. Gardi

Saturday, September 9

11:00 Departure to Terelj

Sunday, September 10

13:00 Survey at tourist camps

Monday, September 11

13:00 Survey at tourist camps

Tuesday, September 12

01:20 Departure from Mongolia

2. 訪問先リスト/Visit Places

PLACE	Lecturer	DATE
MCA Mongolia office KhasBank Building　Second floor, Room 207	Ms. Enkhtuya Oidov Mr. Barry Stern	4-Sep
Ministry of Urban Development and Construction Meeting room at third floor	Mr. Enkhbayar	
City Mayor's Office　twelfth floor	Ms. Oyuntsetseg	6-Sep
Japan town	Mr. Naka	
Technical and Science University	Mr. Gonchigbat ishjamt	
Embassy of Japan	Mr. Kobayashi	7-Sep
JICA office at Bodi Tower	Ms. Riyuko Hirano Mr. Yasuhiro Morimoto	
GTZ Office	Ms. Ruth Erlback	
Mongolia-Japan Center	Mr. Gardi Mr. Hiroshi Ueno	8-Sep

３.研修内容/Training contents

3 - 1. MCC Internship

講演者：Oidov Enkhtuya 氏
場所：ＭＣＡ－Mongolia

9 月 4 日、午前中に MCC のカバーしているカテゴリーとモンゴルにおける経済的な問題とその解決法、それからそのアウトプットについて MCAモンゴリア所長のエンクトゥーヤ氏から講義を受ける機会があった。

１．MCC とは

MCC(Millennium Challenge Corporation)とは、ＭＣＡに基づいて被援助国を選定する役割を持ち、経済成長を通じた貧困削減を目的とし、その達成の可能性が高い国、すなわ

ち、公正な行政、自由市場経済の促進、国民への投資を行っている国を選定して支援を行うアメリカの新しい他国のための開発援助プログラムのための機関である。

２．MCA　Mongolia

MCA（Millennium Challenge Account）とは、3 つの特定分野において実績をあげている国々に対してのみ、無償で配分される援助資金を受け取る独自の資格がある機関である。審議の結果アメリカに適格国と認められた国は、支援対象となるプログラムに関するプロポーザルを作成する。対象プログラムは、被援助国自身が策定した国家開発戦略を基本とし、プログラムの策定や評価も被援助国が中心になって実施する。その後 MCC は、合意締結に向けてプロジェクトパフォーマンス目標の策定や、説明責任の明確化などについて助言する。併せて、合意締結後のモニタリングや評価も行うことになっている。

被援助国の業績に基づいて援助額を引き上げることにより、ODA の健全な使用と、途上国の制度や政策改善を促すための財政的インセンティブを与えようというものである。2005 年度は 16 ヶ国の適格国、12 ヶ国の準適格国が選出されている。そのうちの適格国にモンゴルも選定されており、その組織が MCA　Mongolia である。

３．MCA　Mongolia の課題

まずアメリカの大きな指標が大きく３点（①economic freedom ②good governance ③invest into development people）あり、そしてそれから細かく全部で１２個の項目を抱えている。選定された国はこれらの項目をある程度クリアしないと翌年の予算が本部から配分されないが、モンゴルは毎年ほぼすべての項目をクリアしている。これらの項目の中で一番重要視されるのが政府の汚職であり、これがクリアできていない時点で予算は配分されない。

ＭＣＡは政策の決定に際して３つの方法を有する。以下の

① Public council ②Country Ownership

③ Economic Growth through Poverty Reduction　である。

ＭＣＡ のプロジェクトでは優先順位①Infrastructure ②Private Sector ③Education④Health の、４つの問題があがった。これらについて審議した結果、health に関してはモンゴルでは感染症は流行していないが、日本と同様に内臓などの疾患が多いということが判明した。しかしこの症状は日本でいわゆる贅沢病といわれるような不健康な食生活や運動不足などに起因しているのではなく、モンゴルのストレスフルな社会の結果であるということが判明した。そのため解決には医療や心理カウンセリングなどの専門職の教育が重要になってくるという結果になり、教育と健康の両方について解決の方向が定まった。Private sector は資本主義移行当初は全く活動できていなかったが、1990 年に private sector の活動、運営をサポートする団体ができてからは、2005 年にはモンゴルのＧＤＰ全体の約８０％が private sector によるものにまで成長した。インフラに関しては主にエネルギーインフラは日本からの火力発電所など、十分なサポートをうけていることから特に必要がないという結果に至ったためモンゴルに必要なものを表に書き出してみたところ鉄道の不備が問題

だという結果になった。ＭＣＡ　Mongolia は当初はウランバートルを中心に各アイマックをつなぎ、人々の往来を活発にする構想をたてたが、資本主義がまだ完全に定着しておらず、遊牧生活が未だ残るモンゴルにおいてアイマックを繋いでも経済の発展に際してあまり効果がないということでアメリカの本部によって却下された。そこでＭＣＣは新たな構想に着手、中国からロシアにつながる最短距離の鉄道を作る構想を発表した。巨大大国の交通の接合点となることで、両国から外貨が落ちることを想定している。

４．プロジェクト認可のプロセス

このアジアの２大大陸を結ぶプロジェクトは現在審議中であり、来年７月に認可が下りた後に、200million ドル以上のコストをもって、development project、 DD（6～9 ヶ月間）、compact signing、 project implementation の順で計画を具体化していく。この具体化は 5 年間以内に行わなければいけない。

（参考資料）

最新開発援助動向レポート No.18

http://dakis.fasid.or.jp/report/pdf/report18.pdf#search=%22mcc%20%E6%8F%B4%E5%8A%A9%22

（文責：李　道子）

3－2. Economic Development and Human Resources Training in Mongolia

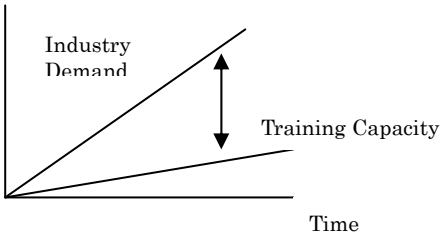
講師：Marvy Stern 氏

場所：MCC-Mongolia

日付：9 月 4 日

１．モンゴルにおける経済（産業）発展に伴う人材の需要と供給

モンゴルでは、経済発展に伴い必要とされる量の人材に対し、トレーニングされた人材が足りておらず､それぞれの産業における専門的な技術を持った人材を供給(Supply)することが必要とされている。しかし、現状では企業などの雇い主側（Employer Side）は人材不足、またそれぞれの専門技術を学ぶ学生側(Student Side)では実際にしっかりしたものを学べる場所が無く、右図のように需要(Demand)に対する人材の供給(Supply)が追いついていない。



２．観光産業(Tourism)におけるトレーニング

モンゴルにおいては、観光産業が重要な経済発展の役割を担う。観光産業の成長には客を満足させる事が重要であり、客をリピーターにすることができるかが鍵となる。そのためには、客がどのような点に満足か、不満なのかを知ることが必要で、それについて議論

を重ねることによってサービスも向上していく(“Feedback is Breakfast of Champions”)。テレルジのツアリストキャンプに参加する我々には、テレルジで行われている他のツアリストキャンプの客に対して、キャンプに対する満足度を測るアンケート調査を行ってもらうのが有効ではないか、という提案がなされた。

観光産業には、おおよそ 25~30 の職種が考えられるが、ツアリストキャンプのホスピタリティーを測る調査（顧客満足度調査）においては、主に次の 4 つ（①Tour Guide、②Tourist Organization Manager、③Cook、④Specialty Tour Guide）の項目に関する質問が必要である。また、それぞれの質問には Products、Service & Support、Delivery、Ordering & Billing、Employees に関しての情報が得られるのが望ましい。次のよう調査手順が施された。

（調査）

１．調査のためのアンケート用紙の作成
２．情報・質問のモンゴル語・英語への翻訳
３．それぞれのツアリストキャンプへの調査許可を得る
４．調査の実行
５．アンケート用紙の回収
６．分析
７．レポート作成

※この調査については4に詳しく報告する。

(大西　庸央)

3 - 3. Ministry of Construction

日付：9 月 4 日

上野と建設省の観光課局長と計画局長との会談概要

モンゴル、ウランバートルの都市計画について。2002 年のマスタープランが想定以上の人口増加等により有効でなくなったことを確認。建設省で、都市計画、マスタープランについての資料を得ようと訪れるも、充分な計画資料は持っておらず、JICA の方が持っているとの報告。現在ウランバートルにある住宅の概要や、ウランバートルに住宅４万戸を建

3 - 4. Habitat for Humanity, Mongolia

日付：9 月 5 日

設する計画についての説明を受けた。　（文責：大西庸央）

１．モンゴル概要

人口は 2006 年の時点で約 280 万人、首都は Ulaanbaatar である。首都には人口の 3 分の 1 が住んでおり、人口は増加傾向にある。特に、中心街を囲む形でゲル地域が形成され、そこにモンゴル中から移りすむ人が急増して過密状況に陥っている。1990 年にモンゴルは社会主義経済から市場経済へと移った。その後、低所得者や失業者が増えた。現在人口の 30%が貧困ラインを下回っているといわれている。そのような貧困層は特にゲル地域に多いといわれ、また、ゲル地域は水道がない、衛生状況が悪いなど環境の悪化が懸念されている。

２．Habitat for Humanity Mongolia について

Habitat for Humanity はキリスト教精神に基づいて活動する非営利の国際的な団体である。貧困削減のために世界 100 カ国で 15 万件以上の住居建築をしている。Habitat for Humanity Mongolia は Habitat for Humanity のモンゴル支部で、2000 年から 320 軒の家を建ててきた。2006 年までに 500 軒、家を建設することが目的である。活動は Ulaanbaatar, Darkhan, Erdenet で家を建設しており、Arvaikheer と Tsetserleg でリノベーションを行っている。

３．住宅を建てる人を選ぶ基準

Habitat for Humanity は、家を建てたい人と一緒に家を建てる。資金は Habitat for Humanity が提供するわけではない。33%が言えの持ち主が払い、3 分の 1 が Habitat から出る。そして残りの金額は寄付金などから出資される。また、支払い能力があると認められた人でなければ、家を一緒に建てる機会は提供されない。

諸経費　＊家の大きさは 32～36 平方メートル	
家	$2000
屋根	$240
天井	$160
ストーブ	$95
ドア	$90
絶縁材と壁	$550

４．実際に現場へ訪れて

私たちは Habitat for Humanity Mongolia が建てた住宅街を訪問した。その一帯はとてもきれいで、花や野菜が庭に植えられていた。また、住宅の周辺には牛や馬がいて、自給自足が可能であった。私たちは、ある 1 軒の部屋を見学させて頂くことができた。私たちが見学した家のおばさんは昔舞台衣装を作っていた方だったので、部屋の中のインテリアもセンスが良いものが揃えられており、きれいであった。モンゴルのゲル地域は広がりつつあり、その生活の実態を把握することは難しい。また、ゲル地域のストーブの煙が大気汚染になり、下水道がないため汚水による地下汚染が心配されている。Habitat for Humanity Mongolia の活動で、一人でも多くの人が環境に優しい設備の整った、安定した家に暮らせることを願う。

(参考資料)

Habitat for Humanity Mongolia (www.hfh.mn)　　(文責：今里　萌)
Habitat for Humanity Japan (http://www.habitatjp.org/japanese/index.html)

3－5. Input Household-“Stove Project”

講師：Oyuntsetseg 氏
場所：City Mayor’s Office 12th floor
日付：9 月 6 日

ゲルに暮らすモンゴルの人間は、石炭をストーブで焚くことによって長く厳しい冬の寒さをしのぐ。そして冬場の食事の調理ももっぱらそのストーブの熱を利用する。伝統を重んじるモンゴル人にとって、燃え続ける「火」は「継続」や「家族」を意味し、その「火」を扱うストーブをとても大事に考えている。ウランバートルを取り巻くゲル地区でもそれは例外ではない。しかし、ゲル地区とはそのようなゲルが密集することで形成されており、特にウランバートル市の北側に伸びるゲル地区のストーブが排出する二酸化炭素や大量の煤などの大気汚染物質が、冬の季節風に北から南へ流されることによる都市の大気汚染が現在問題視されている。

このような問題を引き起こす、ゲル地区のゲルの数はおよそ 120,000 戸とされているが、さらに増加の傾向にある。2001 年、ゲル地区のストーブによる大気汚染が都市の重要な問題と考えられ、city bank のサポートを得て地域の人々の手によって“Stove Project”は始められた。

“Stove Project”とは、ゲル地区のストーブを、新しく開発したストーブと置き換えることに関する一連の計画を指す。

“Stove Project の 5 つのポイント

1. New Facility
2. Social marketing-coal saving
3. Quality assurance
4. Training-ESCO(Energy Service Campany)
5. Monitoring

従来のストーブでは一戸に付き一冬約 5 t の石炭を消費するが、新しいストーブではそれを約 3t まで減らすことができる。新しいストーブがゲル地区に行渡ることにより、1 ストーブあたり 1.5 万 t の二酸化炭素を減らすことができると考えられている。また、新しいストーブには各々を識別できる数字が付与され、それは顧客に関連付けられており、個別のアフターサービスに対応するだけでなく、ゲル地区をより細かくモニタリングすることも目指している。

また、“stove project”は社会的な影響も期待されている。例えば、先にも述べたように、新しいストーブは消費する石炭の量を減らすことができるが、それにより政府は毎年大量に準備する石炭のための費用を浮かすことができる。というのも、石炭がもっとも低コストなエネルギーであるとはいえ、実際モンゴルにおける石炭の経済的に適当な価値や値段というものを誰も知らないからである。それによって、政府がその浮いたコストを他の政策に回すことが期待されている。

以前、人々はどれだけ石炭を消費しているかの意識がなかったため、それを認識させようと世界銀行と city bank が相互に協力する形でキャンペーンを行った。世界銀行は 5 年で 40,000 個のストーブを見越して US$750,000 を出資し、そのキャンペーンの計画を立てた。例えば、新ストーブを小学校や幼稚園、テレビなどでゲル地区に住む人々、特に「次世代」である子どもたちに焦点を当てて繰り返し宣伝することで少しずつ彼らの間に浸透させるというもので、地域に密着した city bank がそれらの計画を実行に移すことで現在 10,000 のストーブをすでに配布することができた。さらに彼らに新しいストーブを試させたところ、80%の人が気に入ったと述べている。その理由として、石炭の使用量が比較的少ない、見た目が良い、また快適であるなどがある。しかし、石炭に対するコストを減らすことができるとしても、古いながらもすでにストーブを持っていることや、一般的にゲル地区の住民は低所得であり、旧ストーブが約＄35 であることに比べ、新ストーブは約＄80 と彼らにとってかなり割高であることから、購入を敬遠する住民もいる。

現在も世界銀行と city bank が相互の協力を得て、“stove project”は進行している。また Khorwo という現地のグループに加え、各国の NGO も現地で参加･協力している。

（文責：川本真也）

3－6. Suruga Corporation in Mongolia

場所：JAPAN TOWN
日付：9 月 6 日

スルガコーポレーションは横浜にあるマンション・商業ビルの建設、不動産会社である。この会社がモンゴルコーポレーションを立ち上げ、ウランバートルに複合住宅地区、「 JAPAN TOWN 」を建設するというニュータウンプロジェクトを立ち上げた。約 880,000 ㎡という広大な土地に、学校、病院、ショッピングセンター、ビジネスセンターを構え、「住む」、「生活する」、「働く」という３つの要素を兼ね備えている。またウランバートルの中心地であるスフバートル広場まで約２㎞、水源地が近くにあり、敷地の 60%が緑地という緑にも豊かなまちを計画している。住宅もマンションから建売り住宅、注文住宅と幅広く建設予定であり、第一期に販売したマンション 122 戸はすべて完売した。これらのプロジェクトが今後 10 年をかけて創り上げられていく。さらにこのプロジェクトにおいて興味深いのは日本人ではなくモンゴル人を労働力として採用している点である。日本で研修を行い、技術を提供、それをモンゴルに持ち帰り現地で活用する。したがってそれぞ

れの住宅地には日本の建築技術が導入されており、日本で建築されているマンションと同様の設備が完備されている。たとえば日本でよく見かけるようなテレビつきのインターフォン、ウォシュレットなど仕様も間取りも日本で私たちが生活で目にするようなものが多い。価格は安いものでも約 55.000 ﾄﾞﾙ、日本円にして約 640 万円から、高いもので約 120.000 ﾄﾞﾙ、日本円で約 1400 万円まである。（1 ﾄﾞﾙ＝116 円で算出）さらにこのプロジェクトで得た利益はモンゴルへ再投資され、将来モンゴルで新たなプロジェクトが立ち上げられることになっている。日本のニュータウン計画理念と技術がモンゴルにどう生かされるのか、興味深い事例として考えられる。

（参考資料）

スルガコーポレーション　ホームページ　モンゴル事情「Four Seasons Gardens」

http://www.fsg-suruga.com/jp/　　(文責：丸山　志奈)

3－7. Mongolian University of Science and Technology

場所：Mongolian University of Science and Technology

日付：9 月 6 日

Mongolian University of Science and Technology (以下 MUST)はモンゴルのウランバートル市内にある技術、科学、人文、経営、語学など 80 以上のコースを提供するモンゴル最大規模の大学である。関学をはじめとする日本の大学や韓国、ヨーロッパの国々とも協定を結び、国際交流も豊かな大学である。学生数は学部生、院生を合わせると 20000 人を越える。その中でも School of Civil Engineering では CAD などによるコンピュータ演習、道路・水道設備、建築、都市計画などの urban study の分野で研究が行われている。その研究は大きく分けて以下の 9 つに絞られる。

１．土木工学―建物の骨組み・地震・地盤・土壌構造
２．コンピュータデザイン―CAD などを用いた都市デザイン
３．道路建設―アスファルト舗装による道路・耐久性・橋建設
４．建設物質と技術―セラミック・鉱物接着剤
５．水工学―水力構造
６．水道設備―公衆衛生・建物の換気方法・熱エネルギーの再利用
７．デザイン―デザインの方法・技術のトレーニング
８．建設技術と管理―極度の寒冷地などにおけるコンクリート、屋根などの強化工事
９．建築と都市計画―都市デザイン・建築デザイン・景観

これらを中心に進められ建築家は 5 年で建築家として認められ資格を取得でき、エンジニアは 4 年で卒業できる。MUST と関学はすでに協定を結んでおり、特にこれから上野ゼミと School of Civil Engineering レベルで協定を結び、さらに新たなプロジェクトが立ち上げられることだろう。

Contact:
School of Civil Engineering in Mongolian University of Science and Technology
location: Block Ⅱ, Main Campus of MUST, 8th Khoroo, Baga Touruu, Sukhbaatar District,Ulaanbaatar
Postal Address: P.O Box-924, Ulaambaatar-46, Mongolia
E-mail: jepces@must.edu.mn
Tel: 976-11-323519
（文責：丸山　志奈）

3-8. Japan Embassy in Mongolia

講師：小林弘之氏(総括)
場所：在モンゴル日本大使館
日付：9 月 7 日

これは、モンゴル基本情報・経済面・政治面、日蒙両国関係などについて小林氏が述べられたことを部門ごとにまとめて編纂したものである。

・日蒙両国関係

日本とモンゴルは 1972 年 2 月 24 日に国交開始し、2007 年に 35 周年を迎える。1990 年にモンゴルのソドノム首相（当時）が初来日訪問し、1991 年に海部総理（当時）が初のモンゴル訪問をして以来、日本がモンゴルの市場経済化に対して積極的な協力を開始した。1997 年には 21 世紀を見据えた今後の両国関係のあり方として「総合的パートナーシップ」を確立することで一致し、二国間のみならず国際場裡において協力関係を進展させることを目標に定めた。最近では、2006 年３月にエンフボルド首相が訪日し会談した際、「総合的パートナーシップ構築に向け、両国関係を今後 10 年間に一層緊密かつ充実した次段階に進める」との固い決意を相互に表明した。そして、同年８月に小泉総理（当時）がモンゴル訪問した際にはその目標を達成するためにアクションプランを策定すると述べ、特に教育面・都市計画を優先的に支援することを表明した。このように、二国間関係は順調に進展しつつある。また、モンゴルは日本が加入していない上海協力機構のオブザーバーである。日本側としてもモンゴルはアジア国交の重要なパイプラインになるであろうと予測しているため、モンゴルを重要視している。

・政治面

モンゴルの政治構造は国家大会議、大統領、内閣と３部構造になっている。内閣では 2006 年 1 月に連立政権が崩壊したが、人民革命党の単独政権は難しいためこれから連立政権が続いていくだろう。また、将来は社会主義を知っている世代と社会主義を知らない若い層の間で教育・社会体制面などでコンフリクトがおこるであろうと言われている。

・経済面

モンゴル市場経済化を受け、両国の貿易総額は年々増加してきているが、輸出相手国としての日本に対する地位は年々低下してきている。これは、モンゴルには日本が関心、興味を抱くようなモノがないためである。モンゴル主要産品であるカシミヤでさえ、中国による流通経路の立ち消え、ヤギの柔毛問題、国際市場におけるカシミヤ価格の低迷などによりカシミヤ製品の増産効果が低減されている。このようにモンゴルのカシミヤ・金・銅など一次産品に依存した産業構造は国際市場価格の動向に大きく左右されているため経済基盤は貧弱なままである。また、日本からの投資件数は年々増加し、2005 年末時点で 216 社・累計額 7200 万ドルに達しているが、ほぼ中小企業である。主な直接投資の例として KDDI・住友商事がモビコム社（通信）を独占、HS 証券がハーン銀行を買い取りなど挙げられるが、億円単位の投資はわずかな状況である。日本の企業は金・銅などに興味をもってきているが、モンゴルの運輸・輸送のインフラ、電力もままならない状況で企業が進出するのにリスクが大きいため、投資しようとする企業はなかなかいない。モンゴルは今、日本の民間大手企業の投資を期待しており、中国・ロシアではなく第三の隣国（日・米・韓など）とのカウンターバランスを求めているのである。

・経済協力

日本はモンゴル対するトップドナーとして積極的にイニシアチブを発揮してきた。その結果、2004 年 11 月 15 日に「対モンゴル国別援助計画」が日本の閣議で承認された。国別援助計画は日本の ODA の効率性、透明性向上に向けた取り組みの一環として、被援助国の政治・経済・社会情勢を踏まえ、開発計画や開発上の課題を勘案し、今後５年程度を目途として具体的な案件策定の指針となるものである。この計画は市場経済を担う制度整備・人材育成支援、地方開発支援、環境保全、経済活動促進のためのインフラ整備支援４つの分野に分けられる。インフラ整備の面では、いままでの都市計画のマスタープランが役立たないため、モンゴル政府は日本にマスタープランの作り直しを要請している状態である。また、人材育成の面では文部科学省がモンゴルの学生が日本で勉強できるように大学間同士の提携を図っている。　（文責：中野亜由見）

3-9.　JICA in Mongolia

講演者：平野氏
場所：ＪＩＣＡモンゴル事務所
日付：9 月 7 日

・ JICA について

JICA は独立行政法人であり、ODA の中でも技術協力を主に行っている団体である。そしえ対モンゴル国別援助方針は 94 年に示されており、それは多く分けて４つに別れる。それらを以下に示す。

① 市場経済を担う制度整備。
② 地方開発支援。
③ 環境保全のための支援。　　④経済活動促進のためのインフラ整備支援。

これらが基本方針である。そしてそれぞれの支援を行うために多数のプロジェクトが組まれている。技術協力プロジェクトであったり、研修員を派遣していたり、開発調査を行い。住民参加による協力の推進を行うということなどがその具体例に当てはまる。

・ ウランバートルの都市計画を支援するまで

まずモンゴル政府から日本政府に都市計画のマスタープランを作成して欲しいという要望が来た。そして日本国内でその要望について見当した。だが、ここでは実施金額の不明さかと情報量の少なさから。2006 年 6 月に一度現地で調査を行うことになった。今はその調査の段階であり、支援を行う予定ではあるが実際に行うかどうかは JICA 自身ではなく、後に外務省が採択を行う。採択されればもう一度詳細調査が行われ、具体案を提示して日本の会社（コンサルタント）が選出されて、そこでようやく支援を実施することになる。

このように日本にマスタープラン作成の要望を出したモンゴルであるが、実は 2002 年にマスタープランが作られている。しかしこのマスタープランは執行体制と規制が伴わず、実態に合わなくなっている。だからこそ、モンゴルは日本に手助けを求めたのである。

・ 今後の JICA モンゴル事務所の活動

今後の JICA はマスタープランを作るだけではなく、後々に日本の協力がなくてもモンゴルが単独でマスタープランを作ることができるようになるプロセスを経ながら、共に次のマスタープランを作るという点を重要視して活動する予定にある。水道などのマスタープランについては世界銀行なども動いているので、いろいろなドナーとの連携が必要であると講義された。

（文責：上田早紀子）

3－10. GTZ– German Technical Cooperation :Integrated Urban Development Program

場所：GTZ　ウランバートルオフィス
日付：9 月 7 日

1．GTZ について

GTZ とは持続可能な開発のため、世界的規模で国際協力を行っている組織である。GTZ は政治、経済、環境、社会に関する開発において、実行可能で前向きな解決策を提供している。また、複雑な改革を支持して、プロセスを変えようとしている。GTZ の活動は持続可能な基礎の上で、人々の生活環境と見通しを利用することに向けて調整をしていく。

GTZ は主にドイツ連邦政府のもとで仕事をしており、主なクライアントは経済協力・開発に関わるドイツ省である。また、他のドイツ内閣やパートナーとなる相手国の政府、EC や国連、世界銀行といった国際機関や民間企業などのためにも仕事をしている。

近年において、GTZ では 2300 の開発プロジェクトやプログラムを 126 カ国で実施してきた。オフィスはそれらの国のうち 67 箇所にある。中心となるオフィスはフランクフルトにあり、約 1000 人の人々が働いている。

２．モンゴルの GTZ について

現在、モンゴル政府は経済、政治体制の変更をしている。これは中央計画経済から民主主義による市場経済への転換の結果によるものである。年間 GNP は$390 となっているが、モンゴルはまだ低所得国だと考えられている。また、モンゴルの経済開発は極端に不十分なエネルギーや輸送インフラによって妨げられている。

このような背景のもと、モンゴルとドイツ政府は経済改革と市場経済の確立、また環境政策や再生可能エネルギー・エネルギー効率を含めた天然資源保護を、両国の協力体制として優先項目であると決めた。

1999 年から GTZ はウランバートルにオフィスを設けている。

３．統合した都市開発プログラム

（Integrated Urban Development Programme）について

GTZ がモンゴルで実施しているプログラム・プロジェクトには経済改革と市場システムの開発（WiRAM）、環境政策と天然資源保護、その他の分野がある。Integrated Urban Development Programme は最初の WiRAM に含まれるプログラムである。

プロジェクトの目的

このプロジェクトの目的は MCUD と UB CG そして、このプログラムに関わるその他の機関におけるプログラム推進力とマネジメント能力を強化することである。プロジェクトには 4 つの主な柱がある。1 つ目は、効率的なコストとエネルギーによる住宅建設の導入。2 つ目は、現在あるアパートの改善。3 つ目は、ゲルエリアにおける統合された開発計画。そして 4 つ目は、職業に関する教育と訓練となっている。このプロジェクトの期間は 2006 年 6 月から 2010 年 6 月までとなっている。

●Cost-and energy-efficient housing

～効率的なコストとエネルギーによる住宅について

まず、1 つ目の項目についてであるが、その目的は効率的なコストとエネルギーにより購入しやすい住宅を広めることである。そのための主な活動として、経済的かつ魅力的な住宅や一貫性のある地域景観を設計し、またそれらを実施するための能力を確立すること。詳細なコストの見積もりや、モニタリング、評価を行うこと。優先的な品質基準やルール、規則を作成することといったことが挙げられる。

●Rehabilitation

～改善について

次に2つ目の項目についてであるが､その目的はアパート所有者たちがUB CGやMCUD､その他組織と協力しながら、効率的なエネルギーと実行可能な方法を用いて、自分たちのアパートを改善していくことである。主な活動としては、効率的なコストとエネルギーに焦点を当てた技術装置を導入すること。革新的な技術への民間投資を促進すること。計画、実行、コントロールにおける相談体制やワークフローの改善。そして、測定方法や給与などに関するシステムの作成といったことが挙げられる。

●Ger-Development

～ゲル開発について

3つ目の項目についてだが、その目的はUB CGとMCUDそして居住者がともに、統合し調和した開発計画を実行することである。主な活動には、他のドナーとともに、ゲルの改良計画を作成すること。ゲルエリアへの基本的インフラ供給を改善するための計画をし、実施すること。プロジェクトや実施状況、それぞれの活動の普及そして記録に対する影響を評価することが挙げられる。

統合した都市計画（Integrated Urban Planning）とは？

今回のプログラムにおける、統合した都市計画とはどういう定義なのか。それは、まずマスタープランや建設計画、地域開発計画といった既存の住宅計画をもとにすることである。また緑地、街灯、ごみ処理、全ての基本的インフラ対策をすること。所有者を含めた、相談プロセスを継続していくことが含まれる。

財政に関して

プログラムで問題となるのは財政的な面である。このプログラムでは、住宅財政と住宅改善のため、財政的に実行可能な計画を作成している。また、営利銀行とHFCとの協力体制を確立し、中間、低所得者層に利用可能なローンを作ること、法的枠組み体制を促進すること、銀行とローンの受取人との間のファシリテーターとなること、ナショナルハウジングセンターと協力すること、といったことも行っている。

Micro and small enterprise promotion (MSE)

～極小、小事業の普及に関して

また、この事業においては建設業界だけではなく、建築素材製造業界における極小、小事業を普及する活動も行っている。さらに、利用可能なローンのため営利銀行と信用貸付基金との間での協力体制を確立したり､大きな土建業者とMSEとの間につながりを確立したりしている。また、MSEとそのスタッフを訓練や、品質管理体制の確立も行っている。

●Demand-driven technical vocational training and education

～職業訓練と教育について

最後に 4 つ目の項目についてだが、その目的は民間企業と協力して職業教育や訓練を導入することである。主な活動としては、先行参加している民間企業とともに職業訓練、教

育に関する政策的枠組みを作成すること。民間企業とともにカリキュラムの開発や、テスト手順、保証を確立すること。職場内訓練を通して訓練（教師のトレーニング、カリキュラム、備品など）を改善していくこと。訓練をする組織体系のマネジメント能力を改善すること。建設分野において、形式的でなく、短期間でスキルが向上するトレーニングを実行すること、ということが挙げられる。

（参考資料）

Integrated Urban Development Programme のプレゼンテーション資料

GTZホームページ　http://www.gtz.de/en/　　（文責：中家麻由子）

3 - 11. NGOs and NPOs in Mongolia

講演者：Gardi 氏

場所：日本センター

日付：9 月 8 日

１．Gardi 氏の略歴

弁護士、警察官、入国管理局で働いた後、現在は貿易コンサルティングのビジネスを行っている。なお、日本にも入国管理のトレーニングのため、日本に 45 日間滞在した経験を持つ。

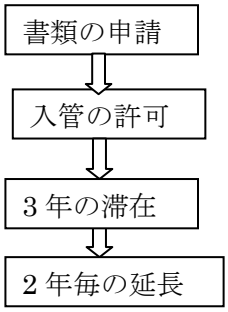
２．モンゴルにおける海外から来たＮＧＯについて

海外のＮＧＯがモンゴルで働く場合、入国管理局に申請を出し、許可をもらわないと活動ができない。また許可をもらった後も活動をモニタリングされる。Gardi 氏は入国管理局勤務時代にＮＧＯ関連の仕事をしていたため、モンゴルの海外で活動するＮＧＯ情勢について詳しい。

■モンゴルにおける海外のＮＧＯ数　128 団体（22 カ国）＊多くがアメリカの団体

■モンゴルにおける日本のＮＧＯ数　　6 団体

３．海外のＮＧＯの申請方法



■書類にはＮＧＯの活動目的、財政、スタッフや責任者、そして本部の情報をまとめて入国管理局に提出する。また、毎年ＮＧＯは入国管理局に活動報告書を提出する義務がある。延長手続きは簡単だが、滞在期限が切れた後の延長申請は認められていない。

■また、ＮＧＯは入国管理局に申請した目的の範囲のみ活動できる。また目的は複数あってもいけない。違反したら即活動停止をさせられる。

４．海外からのＮＧＯの仕事

ＮＧＯの 80%が Humanity（人道）に対する活動を行っている。特に、ホームレスを対象

とした活動が多い。他にも、エコロジーや農業支援を行っている NGO もある。そして、それらのほとんどが宗教に関連した NGO で、そのうち 50%はキリスト教系だという。

５．モンゴル、地元のＮＧＯについて

海外から来る数よりも多い。これらのＮＧＯはモンゴルの法務省に属することになる。その活動範囲も様々で、例えば、男性の権利を支援するＮＧＯもある。また、Gardi 氏の奥さんであるエンクトゥーヤさんは昔 LEOS(Liberal Women's Brain Pool)という、女性の政治的地位の向上を目的としたモンゴルで一番大きなＮＧＯ団体の代表をしていた。

６．Gardi 氏が考えるこれからのモンゴルに必要な NGO

モンゴルは発展段階のために、様々な分野にも来てほしいのが本音である。しかし、近年の鉱山開発における環境問題の悪化が深刻になりつつあるので、環境問題のスペシャリストが特に必要とされるのではないだろうか。また、これからのモンゴルには教育が重要である。海外からの NGO にはホームレスだけでなく、より多くの人に質の高い教育活動を行ってほしい。

７．海外からの人道支援を目的とした NGO が多い理由

特に孤児が社会問題化しているため。この原因には、離婚率や貧困の増加により親から逃げる子どもが増えたこと、そして社会的格差が大きくなっていることに理由があると考えられる。

（参考資料）

■日本の NGO

Friend of Temjin　「テムジンの友塾」

http://www13.ocn.ne.jp/~morisima/temujinnnoyuujuku.htm

日本モンゴル友好協会

http://www.pref.saitama.lg.jp/A02/BQ00/ngo/north/n_kumagaya_nichi_mongo.html

（文責：今里　萌）

3-12. City of Ulaanbaatar

モンゴルは 1992 年に資本主義経済へと移行した。その結果としてインフラ、教育、政治、経済などすべての機能が集中する首都・ウランバートルに人口が増加している。首都の人口は、モンゴルの総人口約 250 万人のうち 100 万人である。また、都市周辺のゲル地域に住む人口はその半分の約 50 万人にも及ぶ。ここでは首都ウランバートルの生活の構成要素である住宅（アパートメント地区、ゲル地区、低所得者住地）や交通事情を紹介する。

●アパートメント地区●

私たちが訪れたアパート地区はソ連型建築であった。複数の傾斜が重なる土地に、緑を基調とした高層アパート（9～12 階位）が連なって建てられていた。アパートの周辺には広場があり、柱と屋根で作られた、老人が集まってボードゲームができるイスと机を備えた建物があった。また、遊具のある公園やバスケットゴールのあるコンクリート張りの場所もあり、住民のレジャー施設は整っていた。しかし、問題も

多いようだ。例えば、窓の格子に趣向が凝らされていて趣がある反面、その窓が割れたままであったりする。タイル張りの壁になぜか“SONY”などのブランド名がスプレーで描かれており、落書きが目立つ。エレベーターの電気が故障していて、昼間に使用するときでも扉が閉まると真っ暗になる。階段部にも採光する窓も電気もなく、基本的に内部は暗い印象がある。このように、住宅のメンテナンスが必要だと思われる箇所が多々見受けられた。また、アパートメントの耐震性にも不安が多いようだ。ウランバートルはこれまで地震が稀であったため、建築物は基本的にレンガを積み上げただけのものやパネルを組み合わせただけのものが多い。一度、本格的に耐震性を補強するべきではないだろうか。

●ゲル地区●

ゲル地区には、人口増加により住宅供給が遅れ、アパートに住むことができない人々が自らのゲルを持ち込み、定住している。拡大を続けるゲル地区の背景の 1 つに、モンゴルでは 2003 年 5 月 1 日から土地の私有化が認められるようになったことが挙げられる。この法律により、人々は 600 平米の土地を無償で手に入れることが出来るようになった。また、1999～2000 年にかけての大冷害（ゾド）により、家畜を失った遊牧民が仕事を求めて都市に移住していることもゲル地区拡大に関係しているようである。ゲル地区の様子は以下の通りである。それぞれの土地を簡単な木の板で区切り、塀にはペンキで番号が書かれている。それらの地区内は整備されておらず砂地である。また、日本のように何曜日にどんなゴミを捨てるなどの決まりや、共通のごみ捨て場が無いようで、道路に面する空き地にはごみが山積みになっていた。我々は、ゲル地区内の 1 つの家庭を見せてもらうことができた。塀で区切られた土地の中には、ゲルが 2 つとトイレ（土地の一部に穴を掘り、その穴を手作りの木の建物で囲ってある）、また犬が 1 匹いた。洗濯物などは、適当に塀などにひもを張り、そこに干してある。ゲル地区の中には、ゲルではなく木造の家を建てて住んでいる人もいる。どの住宅も土地の整備無しに、屋根の色もバラバラな家が建てられ、山の上から密集するゲル地区を見渡すと、山の傾斜に沿ってそのままに建てられた光景を見ることができる。JICA の情報によると、ゲル地区は中心部・中間部・周辺部に分かれ、周辺部へいくに従ってインフラが通っていないという。水を得るには、数百メートルに 1 つある上水施設に汲みに行かなければならない。

●低所得住宅地●

ウランバートル郊外には、低所得者のための住宅地が建設中である。広大な草原の中に、ぽつぽつとまばらに立てられた住宅は、ゲル地区のように塀に囲まれてはいない。これらの地域に住む人々は主に、工場などに雇われて仕事をしている人が多い。この住宅地に立てられている家は簡素ながらも、生活に必要な設備は整っている。例えば、元教師と元エコノミストの退職した夫婦の家には、簡素な壁で仕切られた玄関と居間があった。テレビ、ビデオなどの家電が揃っており、庭には花や作物が植えられてあった。その横には井戸があり、そこから水を得ている。つまり、野菜類を自給することが可能である。トイレはボットン便所で、穴を掘り、そこを木の建物で囲っているゲル地区と同じものである。また、ここでも犬を一匹飼っており、他の住宅では牛を飼っているところもあった。ゲル地区のように、雑然としたものではなく、光景は見渡す限りの草原と山々に囲まれた心地よい場所である。しかし、不便な面も多くある。市内から少し離れているということもあり交通アクセスは良くはない。その上、上下水道などの配管はまだ普及されていないので、料理や飲み水として使用する水は近隣の上水施設まで汲みにいかなければならない。このような上水施設は住宅が集まる地域に 1 つ設置されており、近隣住民は皆タンクを積んだ滑車を

持って水を汲みにやってくるといった生活を送っている。

●ウランバートルの道路●

車は右側通行である。幅が広くとられた道路と公共機関、ソ連式アパートが計画的に配置されている。とあるビルの高い階から町並みを見下ろしたところ、直線的な道路と建築物の交差が連続していた。また、飛びぬけて高い建築物がそれほどない。平らで低めの建築物が続いている。新しい建物の間を縫うかのような細い路地に入るまでは、広い道路は街のどこへでもアクセスしやすくなっている。しかし、道路のキャパシティ以上に車が溢れかえっていることがウランバートルの交通事情を悪化させている。これは、予想以上の人口増加に加えて、市民の自動車所有率が高く、短距離でも車を利用する習慣があることが原因と考えられる。市内における渋滞は深刻になっており、急速に交通整備を整える必要がある。また、自動車所有率が高いうえに、多くのディーゼル車が走行しているため、市内の空気は酷く汚れており大気汚染とその影響が懸念されている。政府が対策を考案中である。交通整備面に関しても、信号機の数は明らかに不足しており、交差点では我先にと車同士が鼻先を押し込みあい、２斜線の道路を３台の車が奪い合う光景なども頻繁に見られる。また、悪態をつくのと同じような感覚でクラクションをならすので、混雑した道路はもちろん、車が何台か一緒に走っているだけで騒々しくクラクションが鳴り響く。運転者のマナーの悪さに加え、歩行者のマナーも良いとは言えず、じりじりと動く車と車の間やほんの一瞬の交通の切れ目を捉えて道路に飛び出してくる。その上、道路自体にも危険がある。マンホールの蓋の多くが盗まれてその穴だけが残っていたり、アスファルトがだいぶ古くなってきたりしていて深いでこぼこや亀裂が走っている。郊外に至ってはでこぼこ道のみであった。現在、市内の道路は一新、舗装整備しようと所々歩行者専用道路が掘り返されている。工事現場の区切りもなにもない無放置状態なためそこに車のタイヤがはまってしまっている危険な光景なども見られた。よって、交通規則や交通整備の改善が重要な課題であるといえる。

（文責：大西庸央・川本真也・上田早紀子）

3-13. Instructions for Mongolian Travel

持ち物

洗面用具、タオル、ウェットティッシュ（顔も体も拭けるデオドラントシートや、赤ちゃん用のお尻ふき等がおすすめ）、肌水、日焼け止め、帽子、サングラス、粉末スポーツドリンク又は水（乗馬時の熱中症予防のための水分補給に）、マスクかバンダナ（移動時の埃よけに）、トイレットペーパー（トイレに装備されていない場合が多い）、シャンプー・リンス、歯ブラシセット、懐中電灯、風邪薬・下痢止め・胃腸薬・消毒薬・絆倉膏、熱吸収冷却シート、カイロ、虫よけ（塗るタイプ）、簡易栄養補給食（体調を崩したときに摂りやすいもの）、嗜好品、携帯灰皿、ごみ袋、変圧器（220Ｖ）・アダプター、米ドル現金（おおよそ１ドル＝1,000 トゥグリク）など。

気候

モンゴルは日本に比べ四季を通して大変乾燥している。特に女性の方は肌の乾燥対策、紫外線対策が必要である。ウランバートルは１，５００ｍの高度にあり太陽と距離が近い為に太陽光線が強烈である。

夏の一時期を除いて雨はほとんど降らない。モンゴル人にとって雨は恵の雨なので、雨が降ると傘も差さずに嬉しそうに雨に濡れる市民を見かける。どうしても心配な人は折りたたみ傘を持参すること。乗馬をする方は急な雨に備えて

雨具を用意すること。

経験上、9 月前半は日本の夏から冬にかけての気候が入り混じっているので、半そでで過ごせる日もあればダウンが必要な場合もある。

服装

半袖・長袖シャツ、フリース、スニーカー、ババシャツ、ウィンドブレーカーは必須。

食事

モンゴル料理の主食は小麦粉とお肉。お肉は羊・牛がメイン。場所によってラクダ・ヤギ・馬・トナカイなどもあり。老若男女問わず料理の半分程度を肉が占めるのが一般市民が好む料理。お肉は固めなので、胃に負担がかかる場合がある。熾烈な環境を生き抜くためにモンゴルの家畜の身体は厚い脂身で保護されている。その分、日本で食べるお肉とは比ならない脂身がある。胃腸の弱い方は胃腸薬を持参することをお勧めする。ウランバートル市内では、ファーストフードをはじめ、和・洋・中レストランもあるのでガイドの人に頼んで連れて行ってもらうことも可能。

治安

スリや強盗、殺人など物騒な事件も多い。特に財布、パスポートなどは本当に注意すること。

携帯電話

一部の日本の携帯電話はモンゴル国内で通話可能。携帯電話会社に確認すること。

両替

両替は市内銀行・両替所・ホテルで可能

時差

日本の春と秋の彼岸の前後からサマー/ウインタータイムが導入される。4 月現在から 9 月末までは日本との時差はない。10 月以降、来年の春までは日本時間－1 時間の差となる。

遊び

お土産はデパート（旧国民デパートなど）で調達可能。夜はクラブに行くことも可能。テレルジでは馬・ラクダにも乗れます。落馬にだけは注意すること。

（文責：中野　亜由見・李　道子）

3-14. Mongolian History

1206 年　チンギスハーンが全モンゴルを支配

1260 年　大ハーンとなったフビライが元を建国

1274 年　文永の役。元・高麗の連合軍が博多湾沿岸に上陸するが、暴風にあって退却

1281 年　弘安の役。元と中国の南宋軍（江南軍）が、再び北九州へ襲来。
暴風の被害もあり、元軍は退却

1368 年　元が明に敗れ、モンゴルによる中国支配が終わる

17 世紀　内外モンゴルが中国（清）の支配下に置かれる

18 世紀～　ロシアと中国がモンゴルの権益をめぐってせめぎあう

1911 年　辛亥革命を機に外モンゴルが独立を宣言し、ホトクトが政権を樹立

1912 年　　清が倒れ、中華民国が成立

1912 年秋　全モンゴル統一を目指すホトクト政権と、 内モンゴルを支配下に置こうとする
中国との間で戦闘が勃発。中国は外モンゴルの自治権を認める

1915 年　　中国とロシア、モンゴルの三国でキャフタ協定を締結。
中国の宗主権の下で外モンゴルの自治権を再確認

1921 年 2 月　ロシア革命（1917 年）後の内戦で敗れたウルゲルン・シュテンベルグ（白軍）がモンゴルを制圧

1921 年 3 月　モンゴル人民党が第 1 回党大会。スフバートルとチョイバルサンが革命を指揮し、モンゴル臨時人民政府を樹立、モンゴル人民義勇軍を創設

1921 年 7 月 11 日　ソ連（赤軍）の支援を受け、独立を達成。
ソビエト赤軍と協力してウルゲン・シュテンベルグ軍を撃破、
イル・フレー（ウランバートル）を解放

1924 年 11 月 26 日　ホトクトの死去に伴い人民共和国を宣言

1930 年　　遊牧国家の匈奴が勢力を誇る。秦や漢と抗争

1930 年　　ソ連をモデルにした急速な農業集団化、私有財産の没収が進む。
チョイバルサンによる独裁と粛清が始まる。

1934 年　ソ連との間で協定締結。ソ連との関係を深める

1939 年　東部国境に日本軍が侵入、ソ連軍とともにこれを防ぐ
（ノモンハン事件、現地ではハルハ河戦争）

1945 年 8 月 8 日　ソ連が対日参戦

1945 年 8 月 10 日　モンゴルが対日戦争に参戦。満州と内モンゴルでソ連軍に合流

1945 年 10 月　中国からの独立の意思を問う国民投票実施。100%近くが独立支持

1946 年 1 月 5 日　国民投票の結果を受け、中国（国民党）がモンゴル独立を承認

1949 年 10 月 1 日　中華人民共和国が成立。その直後、モンゴルは中華人民共和国を承認。ソ連を訪問した中国の毛沢東主席は、モンゴル独立を保証

1956 年　ソ連－モンゴル－中国を結ぶ鉄道が開通。内陸国のモンゴルにも恩恵

1960 年代初頭　中ソ対立が激化。モンゴルはソ連に近い立場をとり続け、
「ソ連の衛星国」とも称される

1972 年　日本との外交関係樹立。その後、日本による経済協力も始まる

1990 年 3 月　ソ連の崩壊を期に、民主化の機運が生まれる。複数政党制を採用するなど共産主義体制終焉へ

1990 年 9 月　大統領制に移行、初代大統領に P.オチルバトを選出

1992 年 2 月 12 日　モンゴル国憲法施行（1 月 13 日採択）、
「モンゴル人民共和国」から「モンゴル国」へ国名変更

1996 年 6 月　民主連合が選挙で勝利し、人民革命党一党支配が終わる

1998 年 10 月 2 日　「民主化の星」ゾリックが暗殺される

2000 年 7 月　民主連合の腐敗批判が高まり、人民革命党が再び政権をとる。

1206　Chinggis Khan dominated Mongolia.

1260　Khubilai Khan established Dadu.

1274　Battle of Bun'ei (Battle of Hakata Bay)　the Mongol fleet landed Hakata Bay, but they withdraw from there by storm.

1281　Battle of Koan(Second Battle of Hakata Bay)　the Mongol fleet landed again, but they withdraw by Kamikaze, a big typhoon.

1368　The last of the nine successors of Khubilai was expelled from Dadu in 1368 by Zhu Yuanzhang, the founder of the Ming Dynasty.

17C　A later Chinese army invaded Mongolia.

18C~　Russia and China contended for right and interests of Mongolia.

1911　Hshinhai Revolution. The Bogdo Khan government was replaced by a new People's Government of Mongolia.

1912　The Republic of China was established.

1915　Tripartite agreement (among China, Mongolia, and Russia)

1921　After revolution broke out in Russia in November 1917, Japan moved to aid anti-Bolshevik forces in Mongolia, and a Japanesefostered pan-Mongol movement was established under the influence of the Buryat Mongols.

The new party Central Committee formed the Mongolian People's Provisional Government. Sukhe Bator's Mongolian Partisan Army (established in February 1921) captured the Mongolian city of Khiagt (across the border from Kyakhta), a new capital was established.

1924　The Mongolian People's Republic was formally established.

1930　The entire socioeconomic pattern was swiftly changed by Choybalsan. The collective farm experiment was dropped, worker cooperatives were abandoned, the cattle tax was reduced, and herders and peasants again were allowed to hold private property.

1934　A Mongolian-Soviet "gentlemen's agreement" was reached that provided for mutual assistance in the face of Japanese advances in Manchuria and Inner Mongolia.

1939　The Mongolian troops and their Soviet allies severely defeated the Japanese. The Soviet Union and Japan signed a truce, and a commission was set up to define the Mongolian-Manchurian border.

1945　Soviet Union had declared war on Japan. Mongolia also declared war on Japan. The Mongolian army joined Soviet troops in invading Inner Mongolia and Manchuria.

1946　China agreed to recognize the independence of Mongolia.

1949　The new People's Republic of China was established.

1956 The railroad was opened from the Soviet Union to China, it through Mongol.

1960s The conflict between the Soviet Union and China. Mongolia took the position the Soviet Union side, and they were called "satellite nation of Soviet."

1972 Mongolia made diplomatic relations with Japan. Also Japan started economic assistance for Mongol.

1990 The complete collapse of the Soviet Union, then Mongolia ended communism. After that they started presidential system.

1992 Mongolia brought the constitution of Mongolia into force. Then they changed their country's name from People's Republic of Mongolia to Mongolia.

1996 The democratic coalition won the election, and the dictatorship by Revolutionary People's Party of Mongolia was ended.

2000 Revolutionary People's Party of Mongolia returned to power because criticism about scandal of the democratic coalition was increased.

（文責：中野　亜由見）

4. Consumer Satisfaction Survey in Terelj

1.　調査目的

この調査はモンゴルを訪れた海外からの観光客がどれだけモンゴルに満足しているかを調べ、それを通してモンゴルの観光産業支援につなげていくものである。

2.　調査背景

昨今、モンゴルには多くの観光客が訪れるようになった。モンゴルは今なお、発展途上国であるが豊富な観光資源を用いて今後ますます発展できる可能性を持っている。しかしながらモンゴルにおいてはまだまだ観光客を受け入れるシステムづくりがなされていない。社会主義体制の名残からサービス精神が根付いているとは言いがたく、トイレやバスなどの設備・施設の面でも観光客にとって満足のいくものでないことが多い。さらにより多くの外国人観光客を迎え、リピーター確保のためにも彼らが満足してモンゴルでお金を使って帰ってもらえるような体制づくりを検討したい。

3.　調査方法

対象：*ゲルで宿泊している観光客

実施時期：2006 年 9 月 9 日から 11 日の 3 日間

実施場所：ウランバートルから車で東に約 1 時間、テレルジという観光客用のゲルが立ち

並ぶツーリストキャンプ
実施方法：アンケート調査
アンケートの内容：「年齢」、「性別」、「国籍」、そのあと７つの項目、「食べ物」、「トイレ」、「暖房」、「値段」、「もてなし」、「部屋の清潔さ」、「総合評価」に対して５段階評価をつけてもらう。さらにコメントとして改善点、意見、感想の欄を設けた。

4.　調査結果

第一に、「国籍」についてであるが、実にさまざまな国からモンゴルに訪れていることが分かった。オーストラリア、ベルギー、中国、フランス、イタリア、韓国など欧米だけでなくアジアからも多くの人がモンゴルを旅行している。ここにモンゴル観光産業発展の可能性があることが分かる。次にどの国籍であっても滞在するにあたり「トイレ」と「お風呂」と暖房の面で問題になっているようである。コメント欄にもトイレットペーパーがきちんと補充されてないこと、９月という寒い時期だけに暖かい水がでないことに対する不満が多かった。これは私たちもゲルに滞在して感じたことであり、多くの旅行者が先進国からであることを考えるとトイレとシャワーなどの不便さは耐え難いものなのだろう。最後に、国籍ごとに、韓国、オランダ、アメリカ、日本で比較すると、アジア人、韓国、日本が「もてなし」のポイントが欧米、オランダ、アメリカと間で少しポイントが離れた。文化的背景やそれぞれの国の個性がこのような結果になったと思う。これは国ごとに求めるサービスが異なるという事実を表している。欧米人についてはどの項目においてもおおよそ高いポイントが得られた点も考慮して考えるとアジア人は求めるサービスの質が高いのかもしれない。以上のことからこの調査によってまずはトイレや暖房設備は必須条件であるが、その後は国ごとに絞った設備投資がよりよいサービスに繋がることが分かった。さらに、これらのデータを長期的に取り続けることで観光産業などの分野におけるさまざまな援助や支援がどれだけ生かされているか、実際のインパクトを見ることができる点でも価値のあるものとなるであろう。

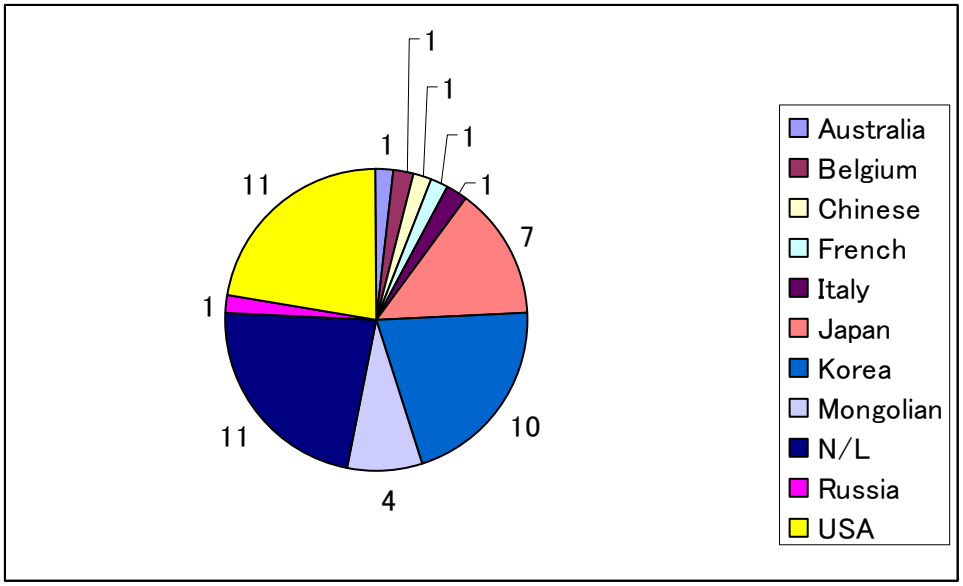
※ゲル

ゲルとは白いテントのようなもので、モンゴルでは遊牧民がこれで生活をしている。このゲルでの宿泊がモンゴルで遊牧民の生活を体験できるということでモンゴルを訪れる観光客の多くが宿泊地として選ばれている。

注：このプロジェクトはもともと、MCC（Millennium Challenge Corporation）のミーティングにおいて Mr.Stern によって提案されたものを、今回モンゴルに行った学生でさらに手を加えて現地調査を実施したものである。

最後にこれらの調査から分析したデータの資料を載せておく。

国籍



アンケート結果

	Age	Gender	Nationality	Food	Restroom	Heating	Price	Hospitality	Room	Overall
1	29	F	USA	5	4	5	N/A	5	5	5
2	24	M	USA	5	4	5	N/A	5	4	5
3	27	F	USA	5	5	N/A	N/A	N/A	N/A	5
4	27	F	USA	4	3	5	N/A	5	5	5
5	25	F	USA	4	3	5	N/A	5	5	5
6	23	F	USA	5	4	5	N/A	4	5	5
7	54	M	Australia	4	3	5	4	4	4	4
8	27	M	USA	4	N/A	N/A	N/A	5	5	5
9	21	M	Mongolian	3	3	N/A	3	2	1	4
10	53	M	Korea	4	4	4	4	3	N/A	4
11	49	M	Korea	4	4	1	5	4	3	4
12	55	M	Korea	5	4	N/A	N/A	N/A	N/A	4
13	25	F	Korea	4	3	3	4	4	4	4
14	17	M	Korea	4	4	4	3	5	N/A	5

15	16	F	Korea	5	5	4	5	3	5	4
16	18	F	Korea	4	3	3	3	4	5	4
17	18	N/A	Korea	5	5	3	3	3	4	4
18	18	F	Korea	5	4	3	4	4	3	5
19	18	M	Korea	5	3	3	3	4	4	5
20	32	F	N/L	5	3	4	N/A	5	5	5
21	42	M	N/L	5	4	4	3	4	5	4
22	44	M	USA	5	4	5	4	4	3	5
23	63	F	N/L	5	5	4	N/A	5	5	5
24	51	F	N/L	5	4	5	4	5	5	5
25	59	F	N/L	5	5	5	4	5	5	4
26	44	N/A	USA	5	4	4	N/A	5	4	5
27	67	M	USA	4	4	4	N/A	4	4	5
28	47	F	USA	5	4	4	N/A	5	4	5
29	60	M	Belgium	5	4	N/A	N/A	5	4	4
30	60	M	N/L	4	4	3	3	4	4	4
31	69	M	N/L	4	4	5	N/A	5	5	4
32	54	F	N/L	5	4	4	3	4	4	5
33	65	F	N/L	5	5	4	N/A	5	5	5
34	30	F	N/L	5	4	5	5	5	5	5
35	62	F	N/L	5	5	3	4	5	4	4
36	27	F	Japan	5	4	5	4	3	5	3
37	43	F	Italy	3	3	3	3	3	N/A	5
38	58	M	French	5	5	5	5	5	5	3
39	27	F	Mongolian	4	4	N/A	4	3	4	4
40	21	M	Mongolian	4	3	N/A	3	4	4	4
41	24	F	Mongolian	3	2	4	3	5	3	4
42	48	M	Chinese	4	N/A	5	1	4	4	3
43	21	F	Japan	2	3	2	5	4	4	4
44	22	F	Japan	2	3	2	5	3	5	4
45	20	F	Japan	4	4	4	5	3	5	4
46	20	M	Japan	2	2	4	5	2	3	5
47	20	M	Japan	2	2	4	N/A	3	4	4
48	21	F	Japan	3	3	4	5	4	5	4
49	50	M	Russia	3.5	4	3	3	4	4	4

アンケートのコメントリスト

(Gel 1)

- What is the most needed improvement?

27yrs/F/USA, 25yrs/F/USA, 54 yrs/M/Australian

Toilet paper in the bathroom, Restroom facilities, hot water and shower

27yrs/M/USA

Drinking water in the gel

23yrs/F/USA

Clean up

- Do you have any comments?

29yrs/F/USA

The camp is very nice. Very friendly and clean atmosphere

24yrs/M/USA

It's very beautiful and peaceful here. I am lucky to get out of the city and into the country.

54yrs/M/Australian

Very relaxing in the countryside.

(Gel 2)

- What is the most needed improvement?

21yrs/M/Mongolia, 53yrs/M/Korea

More services

18yrs/F/Korea, 49yrs/M/Korea 25yrs/F/Korea,67yrs/M/USA

Heating

17yrs/M/Korea

Foods are too slowly

44yrs/M/USA

Ger smells like manure.

Add a library to exchange books

63yrs/F/NL,66yrs/M/USA,47yrs/F/USA,60yrs/M/Belgium,30yrs/F/NL

Bathroom and hot showers

59yrs/F/NL

Sitting space outside

69yrs/M/NL

A little more trees around the camps.

- Do you have any comments?

55yrs/M/Korea

Good

32yrs/F/NL

It's perfect.

49yrs/M/Korea

Speaking in English. Great place

44yrs/M/USA

Second best camp in Mongolia after three camels lodge.

63yrs/F/NL

Facility to lay down our things in the bathroom. Something more to hang our cloths on.

51yrs/F/NL

Sitting place outside

59yrs/F/NL,66yrs/M/USA

We are having a great time.

69yrs/M/NL

It's almost a perfect place to be.

The most important issue: Try to avoid pollution- in what say- of this marvelous surrounding. use more modest colors.

60yrs/M/NL

Let it be as it is.

67yrs/M/USA, 47yrs/F/USA,54yrs/F/NL, 62yrs/F/NL

Good

30yrs/F/NL

This is a really nice camp, the hospitality is great. I would certainly recommend this place to other people.

(Gel 3)

- What is the most needed improvement?

43yrs/F/Italy

Entrance hall and restrooms

58yrs/M/French

Shower(hot water)

48yrs/M/Chinese

Road

21yrs/F/JPN

I want to know how long it takes to serve the meal.

22yrs/M/JPN

Heating

20yrs/M/JPN, 21yrs/F/JPN

Restroom: water doesn't flow

20yrs/F/JPN

Toilet paper

20yrs/M/JPN

Low of Ger is not good.

27yrs/F/Mongolian

More facilities and more colorful

- Do you have any comments?

58yrs/M/French

No dust cleaner after 9 pm.

研究演習Ⅰ名簿

＊研修旅行参加者 Participants

＊教授： 上野真城子 Makiko Ueno

＊李 道子	Michiko Ri	＊中野 亜由見	Ayumi Nakano
＊丸山 志奈	Sina Maruyama	＊上田 早紀子	Sakiko Ueda
＊今里 萌	Moe Imasato	＊中家 麻由子	Mayuko Nakaie
王 復羊	Ou Fukuyou	＊石川 正俊	Masatoshi Ishikawa
＊大西 庸央	Ohnishi Nobuhisa	岩切 千佳	Chika Iwakiri
吉本 瑛美	Emi Yoshimoto	池島 成美	Narumi Ikejima
＊川本 真也	Shinya Kawamoto	篠原 朋子	Tomoko Shinohara

現地アドバイザー adviser : Mr. Gardi

現 地 通 訳 interpreter : Tenuun Gardi（computer programmer）

Badruun Gardi (Stanford University)

編集 関西学院大学 総合政策学部 上野研究室 研修演習Ⅰ

669－1337 三田市学園２－１ TEL/FAX 81-079-565-8157 E-mail: makikomueno@ksc.kwansei.ac.jp

School of Policy Studies, Kwansei Gakuin University. 2-1, Gakuen, Sand, Hyogo, 669-1337, Japan

---